

優秀賞

【題名】 食から伝わるメッセージ
【学校・学年】 大山町立大山中学校三学年
【氏名】 小原 乙華

私の中学校では、全校生徒揃ってランチル
ームで給食を食べる。そして、そのランチル
ームには給食センターが隣接していて、大き
なガラス窓越しに大きな鍋や冷蔵庫、働く調
理員さんたちの姿が見えるのだ。笑い声のあ
ふれるランチルームの中から、ふと調理室を
見るようになってのは、この本を読んだから
だろう。
調理員さんたちが私たちに給食をつくって
くださっているように、平澤さんもまた、学
校給食をつくっている方の一人だった。その
平澤さんが給食を改善するために向かった先
はブリタンだった。異国の地に、それもたっ
た一人で飛び立った彼女の勇気と行動力に感
銘を受けた。私は全く逆で、潔く決断するの
が苦手で、あれこれと先の事などを考えて迷
た挙げ句、肝心な一歩を踏み出せないことが
多い。平澤さんも、ブリタン行きを即決した
はいいが、実際ピンチの連続だったようだ。
レシピを書き込んだ「虎の巻ノート」を忘れ

てしまったり、現地にオーブンがなかったり
 しかし、「ほかに方法がないか」と考え切り
 めけていく平澤さんの姿から、やる前から失
 敗を恐れてしないよりも、まずは挑戦してみ
 る。つまり、まずいたらその時はその時で知恵を使
 えば何とかなるさ、という物事に対する前向
 きな生き方を学んだ。

臨時休業中、外に出られない私や妹、弟の
 ために、お母さんは私たちの大好きなフレ
 ンド、ストヤグラタンなどを作ってくれたり

たこやきパーティーを開いてくれたりした。
 「こんな事しかできなくてごめんね」。

とお母さんは言うけれど、そんな事は全くな
 かった。お母さんの「食」という形の支えが
 あったからこそ休業中も勉強に運動に頑張れ
 たし、退屈だともあまり思わなかった。平澤
 さんもまた、料理を学ぶ、習うという習慣の
 ないブリタンの地で、料理を作ったり教えた
 りして、たくさんの人を笑顔にした。私はこ
 れまでにないほど「食」の持つ力の偉大さを

強く感じた。

私たちは一日に3回食事をしている。だから「食」の存在があまりにも身近すぎて時に当たり前の事となり、その価値を忘れてしまてはいないだろうか。地球上のどこにいても食事が生活に欠かせないものであることに、きっと変わりはないだろう。日本でも、ブータンでも。だから、私は一食一食に、それを作ってくれたお母さんや調理員さん、そのほか色んな形で私たちの食事を支えてくれていらっしゃる人の存在を、そして思いを感じながら食べる。そして、毎日を生きているのだ。